

## 総括研究報告書

- 研究開発課題名：日米医学協力計画を基軸としたウイルス性疾患の感染制御に関する研究
- 研究開発代表者：有川二郎（国立大学法人北海道大学医学研究科・教授）
- 研究開発の成果

日米医学研究協力計画は、昭和40年1月13日に佐藤栄作総理とリンドンジョンソン大統領の発表した日米共同声明ならびに同年6月1日の閣議了解をもとに開始された。本計画の目的は、日米両国が共同してアジアにまん延する疾病制圧を推進することである。このため、日米医学協力委員会および9つの専門部会が設けられ、日米の研究者間での相互討論、情報交換等を通じて当該研究の発展を行って来た。

本研究開発課題では、ウイルス感染症を担当とする3つの専門部会、ウイルス性疾患部会（部会長、有川二郎、新興ウイルス感染症、ウイルス性下痢症、ウイルス性出血熱、狂犬病およびアルボウイルス感染症）、肝炎部会（部会長、東京大学、小池和彦、A, B, C, E型肝炎ウイルス疾患）、及びエイズ部会（部会長、東京大学、俣野哲朗、HIV感染症）が、日米医学研究協力計画を基軸として、それぞれの疾患の研究推進を目指した。2015年度は、米国ベセスダ市で開催された日米医学研究会50周年記念式典、第18回汎太平洋新興感染症国際会議（EID国際会議）、ならびに各日米合同専門部会に出席し、米国側との十分な情報交換、研究発表や討議を実施した。

ウイルス性疾患部会では、部会員の協力のもと、担当ウイルス疾患について米側メンバーとの情報交換を進め、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）について、簡便かつ鋭敏なウイルス核酸検出法の開発、ロタウイルス流行国での非定型的ロタウイルスの流行の有無の検討、腎症候性出血熱（HFRS）の安全・簡便な中和試験法の開発、狂犬病ウイルス抗ウイルス薬の開発、また、デング熱について、東南アジア各国における流行ウイルスの比較解析を行った。これらの研究の一部は、日米合同専門部会において、疫学・進化、宿主相互関係、治療・ワクチン及びポスター発表の4セッションに分かれて、日米研究者ならびにアジアからの若手招待研究者から発表され、活発な討議がなされ、若手研究者の交流の活性化が行われた。

肝炎部会では、アジアにおけるE型肝炎とC型肝炎を中心として、情報交換・収集を進めた。平成28年1月の米国での日米医学肝炎部会では、この2つをメインテーマとして討論した。E型肝炎では、先進国と途上国におけるE型肝炎の疫学、HEVアウトブレイクの日本、バングラデシュ、ネパールにおける比較、げっ歯類における新規Hepevirusの同定とin vivo study、種を越えたHEV感染におけるウイルスの決定因子などの発表がなされた。HCVワクチンに関しては、DAA治療が行われ>95%のSVR（ウイルス排除）が達成されるようになった現在、HCVワクチンに対する熱意は国によって異っていた。しかし、HEV、HAV、HBVについては両国とアジア諸国間で共通の問題点が存在しており、今後も共同研究が行われて行くことが確認された。また、若手研究者交流活性化につながる議論が行えたことは意義深い。

エイズ部会では、主にアジアに着目し、米国HLA遺伝子型解析専門家との情報交換を進めながら、ベトナムのHIV感染者のHLA遺伝子型およびHIV多様性情報収集を推進した。平成27年9月には、あわじしま感染症・免疫フォーラムと共催で日米エイズ専門家間会議を開催した。さらに、平成28年1月の米国での日米会議50周年記念式典、EID会議および日米エイズ専門部会の企画に貢献し、これら会議で日米研究者間の情報交換を推進した。特に日米エイズ専門部会では、「HIV transmission」をテーマとし、「HIV感染伝播に影響を及ぼす宿主因子」、「HIV感染伝播のメカニズム」、「HIV感染伝播動態」、「HIV感染拡大阻止に向けた取組み」の4セッションに分けて議論を深め、最新情報を交換するとともに、若手研究者交流活性化につながる議論を行った。